

がん教育の授業を行う上での 児童生徒への配慮について ～がんに関わる人々への調査から見えて きたこと～

1. 主題設定の理由

がん教育の推進が求められる中、児童生徒や家族等ががんの当事者である場合や児童生徒の家族等、身近にがんの当事者がいる可能性がある中で、児童生徒へどのような配慮をしたらよいか分からず、授業実践をためらっているという現状がある。

がん教育に関わる人々に対して調査を行い、がん教育を行う際にどのような配慮が必要かを明らかにすることができれば、学校においてがん教育に積極的に取り組み、よりよい実践ができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2. 研究の仮説

がん経験者やがんに関わる人々にがん教育実践の際に配慮してほしいことを調査すれば、児童生徒への具体的な配慮事項が明らかになるであろう。

3. 研究内容

(1) 記述式質問紙による配慮事項の調査

がん経験者交流会の参加者に質問紙を配付し、調査をした。

(2) 半構造化インタビューによる配慮事項の調査

がんに関わる人々（小学校教諭、中学校養護教諭、高等学校体育科教諭、がん看護専門看護師、がん経験者交流会参加者）にインタビューし、調査した。

(3) 配慮事項リーフレットの作成

4. 結論

がん経験者やがんに関わる人々にがん教育実践の際に配慮してほしいことを調査したところ、児童生徒への具体的な配慮事項が明らかになった。

がん教育の授業を行う上で必要な配慮は、「授業前に行う配慮」「授業中に行う配慮」「授業後に行う配慮」「授業前から授業後までを通して行う配慮」という4つのコアカテゴリーに分類し、整理した。

研究を進めていく中で、「必要な配慮を理解し、安心した上でがん教育を行いたい」という私たちの考えは、日頃からあらゆる場面で配慮を重ねて学校教育活動を行っているからこそ生まれた願いなのだという事に気付いた。

今回の調査で明らかになった配慮事項をまとめたリーフレットを作成した。リーフレットは、手に取って見てもらいやすいように、『簡易版』と更に詳しく知りたいときのために『詳細版』を作成した。

さらに、このリーフレットの活用ががん教育を実践する際の配慮に関する不安を軽減し、よりよいがん教育の実践に繋がるかを検証するため、千葉市内小中学校の養護教諭にリーフレットの活用前後にアンケート調査を実施している。

今後は、アンケート調査の検証結果を生かし、がん教育実践に活用できる指導案や資料の作成に取り組んでいきたい。

I はじめに

がんは、日本人の死亡原因の第1位であり、2人に1人が生涯に何らかのがんと診断されるなど、国民の最大の健康課題といえる。また、早期発見、早期治療により、生存率が向上し、長く付き合う病気となってきている。

がん対策基本法の下で政府が策定した第3期がん対策推進基本計画（2017～2022年）では、「子どもが健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理するとともに、がんに対する正しい知識、がん患者への理解及び命の大切さに対する認識を深めることが大切である」と示された。さらに、新学習指導要領では、中学校保健体育「健康な生活と疾病の予防」と高等学校保健体育「現代社会と健康」において、「がんについても取り扱うものとする」と明記され、学校におけるがん教育の推進が求められている。

このように、がん教育の推進が求められる中で、私たち教職員は正しい知識を学び、授業実践をしたいと考える一方、児童生徒や家族等ががんの当事者である場合や児童生徒の家族等、身近にがんの当事者がいる可能性がある中で、児童生徒へどのような配慮をしたらよいか分からず、授業実践をためらっている現状がある。また、2013年に千葉県がん対策審議会が行った「がん教育実態調査」において、「本人家族ががんの場合の配慮」についての自由記載が多数挙げられており、配慮に関する不安が、授業実践を躊躇させる一因になっていると考えられる。さらに、「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」（2015年）に配慮事項が列記はされているが、具体的には示されておらず、各学校の実情に任されている。

これらのことから、児童生徒への具体的な配慮を明らかにすることができれば、学校においてがん教育に取り組みやすくなり、よりよい実践ができるのではないかと考えた。

II 研究目的

- 1 がん教育の授業を行う際に、どのような配慮が必要かを明らかにする。
- 2 明らかになった配慮事項を元にリーフレットを作成する。

III 用語の定義

本研究において使用する以下の語句について、次の定義を採用した。

がん教育：健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育¹⁾。

配慮：がん教育の授業前までに以下のような事例に該当する児童生徒の把握ができる場合はもとより、把握できない場合についても授業を展開する上で求められること¹⁾。小児がんの当事者、小児がんにかかったことのある児童生徒等がいる場合。家族にがん患者がいる児童生徒等や、家族をがんで亡くした児童生徒等がいる場合。生活習慣が主な原因とならないがんもあることから、特に、これらのがん患者が身近にいる場合。がんに限らず、重病・難病等にかかったことのある児童生徒や、家族に該当患者がいたり、家族を亡くしたりした児童生徒等がいる場合¹⁾。

IV 研究の方法

1 記述式質問紙による配慮事項の調査（調査1）

(1) 対象者

がん経験者交流会の参加者 30 人に対して、研究者が研究の主旨を説明した上で質問紙を配付し、同意が得られた 22 人を対象者とした。

(2) 調査時期

2018 年 11 月

[表1] 質問内容

(3) データ収集方法 記述式質問紙を配付し、以下の項目に回答してもらった。

| 項目 | 内容 |
|----|---|
| 1 | 学校でがん教育の授業をする際に、児童生徒に配慮して欲しいことはどんなことだと思われますか。(教員側が事前知っておいてほしいこと・教えてほしい内容・扱ってほしくない内容・使ってほしくない言葉など) |
| 2 | 児童生徒へのがん教育に何を期待しますか。 |

2 半構造化インタビューによる配慮事項の調査（調査2）

(1) 対象者

がんに関わる人々11人（小学校教諭1人、中学校養護教諭1人、高等学校体育科教諭1人、がん看護専門看護師1人、がん経験者交流会の参加者7人）で、その概要は表2に示す通りである。がん経験者交流会の参加者とは、記述式質問紙に回答した22人のうち、インタビューに同意した者である（表2）。

[表2] 半構造化インタビューの対象者概要

| | 年齢 | 性別 | 立場 | がんとの関わり |
|----|-----|----|---------------------------|----------------------|
| A氏 | 60代 | 男 | 小学校教諭 | がん教育の推進者 |
| B氏 | 50代 | 女 | 中学校養護教諭 | 県がん教育モデル校で授業に関わる |
| C氏 | 50代 | 男 | 高等学校保健体育科教諭 | 県がん教育モデル校で授業実践 |
| D氏 | 50代 | 女 | 訪問看護ステーション所長 がん看護専門看護師 | 大学病院や訪問看護でがん患者のケアに従事 |
| E氏 | 40代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| F氏 | 40代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| G氏 | 40代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| H氏 | 40代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| I氏 | 40代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| J氏 | 60代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |
| K氏 | 70代 | 女 | がん経験者交流会の参加者 | がん経験者 |

(2) 調査時期

2018 年 10 月～2019 年 11 月

(3) データ収集方法

がんに関わる人々11人に対し、インタビューガイドに沿ってインタビューを行った（表3）。質問項目を問いかけたり、内容で不明な点を問い返したりする以外、研究者は聞く立場に徹しながらインタビューを進めた。インタビューは1人 30～60分程度行っ

た。インタビューの内容は本人の承諾を得て紙面に記録した。インタビューと記録は、できる限り2人以上で行い、信頼性の確保に努めた。

[表3] インタビューガイド

| 対象者 | インタビューガイドの内容 |
|-------------|--|
| 教諭、 養護教諭 | ・配慮が必要な児童生徒を把握する方法、 ・授業時における配慮の方法 ・家族への周知の方法 |
| がん看護専門看護師 | ・がん経験者の支援について、学校でのがん教育に期待すること |
| がん経験者 | ・児童生徒に配慮してほしいこと ・教員に知っておいてほしいこと ・授業中に使ってほしくない言葉や扱ってほしくない内容 ・児童生徒へのがん教育に期待すること ・嫌な思いをした経験や励まされた経験 |

3 研究データの分析方法

記述式質問紙調査と半構造化インタビューから得られた内容をデータとした。がん教育の授業を行う上での配慮に関連する部分について、対象者が語ったり、書いたりした言葉の意味内容を損なわないようにコード化した。そして、意味内容が類似しているものを集めてサブカテゴリー化し、さらに類似性に従って抽象化し、カテゴリー化、コアカテゴリー化した。コード化及びカテゴリー化は20人以上の研究メンバーで複数回実施し、信頼性と妥当性の確保に努めた。また、カテゴリー分類表における表記は、表4の通りとする(表4)。

[表4] 研究対象者のカテゴリー分類表上の表記

| 研究対象者 | カテゴリー分類表上の表記 |
|--------------|--------------|
| 小学校教諭 | 小 |
| 中学校養護教諭 | 中 |
| 高等学校保健体育科教諭 | 高 |
| がん看護専門看護師 | 看 |
| がん経験者交流会の参加者 | 経 |

4 配慮事項リーフレットの作成

がん教育の授業を行う上で必要な配慮事項をまとめたリーフレットを作成した。データを分析し、コアカテゴリーを大分類、カテゴリーを中分類とし、サブカテゴリーは中分類の具体的な配慮や注意事項としてまとめて記載した。誰でも活用しやすい『簡易版』(資料1)と、更に詳しく知りたいときのための『詳細版』(資料2)を作成した。

V 結果と考察

データ分析の結果、がん教育の授業を行う上で必要な配慮は、「授業前に行う配慮」「授業中に行う配慮」「授業後に行う配慮」「授業前から授業後までを通して行う配慮」という4つのコアカテゴリーに分けられた。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》で示す。

1 授業前に行う配慮

がん教育の授業前に行う配慮には、《保健調査票からの抽出》《文書による家族への通知》《児童生徒から家族への口頭伝達》《児童生徒への口頭調査》《児童生徒へのアンケート調査》《学校職員への調査》《授業を受けるかどうかを児童生徒に確認》《授業を実施するかどうか学校が判断》《外部講師との指導内容の確認》《授業内容の工夫や手法の検討》《治療による身体的変化の扱い方検討》《家族にがん経験者がいることを前提とした授業》《家族に

がん経験者がいる児童生徒への接し方》《家族にがん経験者がいる児童生徒の不安感への理解》という14個のサブカテゴリーが挙げられた。

また、14個のサブカテゴリーは、【既往歴がある児童生徒の把握】【家族への周知】【家族にがん経験者がいる児童生徒の把握】【家族にがん経験者がいる児童生徒への対応】【指導内容の検討】【授業者の心構え】という6つのカテゴリーにまとめられた(表5)。

【表5】「授業前に行う配慮」に関するカテゴリー分類

| 【カテゴリー】 | 《サブカテゴリー》 | コード |
|-------------------------|-------------------|--|
| (1) 既往歴がある児童生徒の把握 | 保健調査票からの抽出 | 保健調査票をチェックした。(高) |
| | | がんや難病の児童生徒がいるかどうかを保健調査票で調査した。(中) |
| (2) 家族への周知 | 文書による家族への通知 | 家族に対して学年だよりで事前に授業内容を通知する。(中) |
| | | 家族の授業参観を可能にした。(中) |
| (3) 家族にがん経験者がいる児童生徒の把握 | 児童生徒から家族への口頭伝達 | 授業で「がんについて触れる」ことを児童生徒から家族に伝えるように言った。(高) |
| | 児童生徒への口頭調査 | 児童生徒に口頭で、家族にがん患者がいるかどうかを尋ねた。(高) |
| (4) 家族にがん経験者がいる児童生徒への対応 | 児童生徒へのアンケート調査 | 事前のアンケートに「家族でがんにかかった人はいますか？」等の質問項目を入れておくことよ。(中) |
| | 学校職員への調査 | 担任や養護教諭へ事前に聞いた。(高) |
| (5) 指導内容の検討 | 授業を受けるかどうか児童生徒に確認 | 家族のがんについて、児童生徒が親からどう聞いてたか、どう話したかを確認する。(看) |
| | 学校が授業を行うかどうかを判断 | 授業中に話を聞くのが辛くなったら、遠慮なく退室してよいと声をかける。(小) |
| (6) 授業者の心構え | 外部講師と指導内容を確認 | 授業を受けるのは強制ではないと伝える。(高) |
| | 授業者の工夫や手法の検討 | 「家族にも伝えて相談して」と言った。(高) |
| (7) 授業者の心構え | 治療による身体的変化の扱い方の検討 | 学年主任から授業してよいか家族に確認した。(両親が亡くなり、母はがんだった事例)(中) |
| | 授業者の心構え | 児童生徒、家族、担任で授業を受けるかどうかを相談した。(両親が亡くなり、母はがんだった事例)(中) |
| (8) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 両親が亡くなった(母はがん)生徒がいたクラスは保健のみ、他のクラスは保健、道徳を実施した。(中) |
| | 授業者の心構え | 体験談を使う場合には、児童生徒に刺激が強かったり、禁句のようなものがあるので注意が必要。(中) |
| (9) 授業者の心構え | 授業者の心構え | アサーティブコミュニケーション(相手の気持ちを書さずに声をかける)を取り入れる。(小) |
| | 授業者の心構え | 誰が展開しても同じ教育効果が得られるようにする。(小) |
| (10) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 家族ががん治療をしている児童生徒に対して、身体的な(髪の毛がないなど)ことを取り上げないでほしい。(経) |
| | 授業者の心構え | 該当者がいることが前提で授業を展開することが求められる。(小) |
| (11) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 事前に把握できていなくても、配慮が必要な児童生徒がいるつもりで授業することが大切。(中) |
| | 授業者の心構え | 特別に配慮が必要と考えずに授業を行った。(高) |
| (12) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 配慮が必要な児童生徒がいるものだと思って授業を行う。(高) |
| | 授業者の心構え | (配慮が必要な児童生徒が)いてもいなくても同じ内容で授業を行う。(小) |
| (13) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 家族にがん患者がいることを先生が知っても、態度を変えずそっと見守ってほしい。(経) |
| | 授業者の心構え | 患者も家族も普通にしたい。見守ってくれることがありがたい。(経) |
| (14) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 普通にしてもらったほうがよい。(経) |
| | 授業者の心構え | 子どもから「学校ではいつも通りにしたい、皆には知られたくない。」と言われた。(経) |
| (15) 授業者の心構え | 授業者の心構え | 子どもから「学校ではいつも通りにしたい、皆には知られたくない。」と言われた。(経) |
| | 授業者の心構え | 家族にがんを患っている方がいる場合には不安を与えることがある。(経) |

(1) 【既往歴がある児童生徒の把握】

がん教育の実践校では、毎年始めに実施している《保健調査票から抽出》し、既往歴がある児童生徒を把握していた。

(2) 【家族への周知】

実施校では、授業の実施について学年だより等を活用して《文書による家族への通知》や、《児童生徒から家族への口頭伝達》を行ったり、授業参観を可能にしたりしていた。

文書等で保護者に事前に周知をはかることで、がん教育について保護者からの理解を得やすくなると考えられた。

(3) 【家族にがん経験者がいる児童生徒の把握】

授業前の《児童生徒へのアンケート調査》に「家族でがんにかかった人はいますか」といった項目を入れる方法や《児童生徒への口頭調査》として「家族にがん経験者がいるかどうか」を尋ねていた。また、担任や養護教諭等《学校職員への調査》により情報収集し、職員間で共有していた。これらの調査を行う場合には、児童生徒や家族に対して、事前に「言いたくなければ言わなくてもよい」とも伝えていた。プライバシーにかかわる問題でもあり、丁寧な対応を心掛けていることが分かった。

(4) 【家族にがん経験者がいる児童生徒への対応】

《授業を受けるかどうかを児童生徒に確認》し、児童生徒が授業を受けない選択もできるよう保証していた。さらに、授業を受けるのは強制ではなく、授業中に話を聞くのが辛くなったら退席してもよいことを伝えた上で、本人の意思を確認していた。その際には、家族のがんについて児童生徒がどのように聞いているかなどを確認することが適切な配慮につながる事が分かった。これらは学校において、日常から人間関係が構築されているからこそできる細やかな配慮だと考えられる。

さらに、配慮を要する児童生徒が個人的に授業を受けない権利を保障するだけでなく、家族や児童生徒らと相談した上で《授業を行うかどうかを学校が判断》した実施校もあった。

(5) 【指導内容の検討】

外部講師を招く場合には、児童生徒にとって刺激的な内容や、がんに対するネガティブな表現がないかどうかということを事前に《外部講師と指導内容を確認》していた。

林³⁾も外部講師を活用する際には「事前に校長や担任、養護教諭などと面談しておくことが望ましい。学校や児童生徒の情報を得ることで、外部講師への要望を把握したり、実際の授業内容の詳細な打ち合わせができる」と述べている。専門家等の外部講師と児童生徒の発達段階や個性をよく知る教職員が事前事後に打ち合わせを行うことで授業のねらいを押さえ、教育効果を高めることが期待される。

また、外部講師を依頼するかどうかにかかわらず、《授業内容の工夫や手法の検討》をしてよりよい授業を目指していた。

なお、《治療による身体的変化の扱い方の検討》については、特にがん経験者および経験者を家族に持つ児童生徒にとっては大変デリケートな問題である。がん経験者からは家族ががん治療をしている児童に対しては、髪が抜ける等がん治療による影響をとりあげないでほしいとの要望があった。

(6) 【授業者の心構え】

実施校では、《家族にがん経験者がいることを前提とした授業》を展開していた。また、《家族にがん経験者がいる児童生徒への接し方》では、《家族にがん経験者がいる児童生徒の不安感への理解》をした上で、他の児童生徒に接すると同じ態度でそっと見守っていた。

コードには、「子どもから学校ではいつも通りにしていきたい、皆には知られたくない

と言われた。」ということが挙げられた。これに関して、大曲ら²⁾の研究でも「クラスメイトや友人等に自分の親の病気や入院について話すことに関して葛藤」する子どもの様子が明らかになっている。また、林³⁾が「がん患者である保護者の中には、そのことが子どもへのいじめの原因になるのではないか、保護者間の関係が気まづくなってしまうのではないかという危惧から、学校側にごん患者であることを隠している人も多い。」と述べている。さらに神前ら⁴⁾の調査では、「がんの親をもつ子どもの有無」を小中学校の約半数は現状把握しておらず、大半の教員が「がんの親をもつ子ども及び家族からの相談」を受けた経験がない現状が明らかになっている。これらの先行研究が示しているように、家族にごん経験のある児童生徒は、私達が予想するより多い実態がありそうである。野口⁵⁾は、「がん教育は家族にごん患者や亡き人、つらい体験をした子どもも教職員も『必ずいる』前提で実施するべきである。」と述べている。実施校では、「事前にすべての児童生徒や家族の既往歴を把握できなかったとしても、『家族にごん経験者がいることを前提とした授業』を展開」していた。中には「配慮の必要な児童生徒がいるものだと思って授業を行ったので、特別な配慮が必要だと考えずに授業を行った」という学校もあった。

2 授業中に行う配慮

がん教育の授業中に行う配慮には、《がんイコール死ではない》《がんは誰でもかかる可能性のある病気》《がんを特別視しない》《がんの原因》《がんにかかるのは誰のせいでもない》《治療による身体的変化》《共感する力》《共生への理解》《自分のからだへの関心》《セルフケア能力（健康管理能力）》《意思決定力》《分かりやすい言葉》《優しい言葉かけ》《伝え方に注意が必要な言葉》《落ち着いた態度》《柔軟な対応》という16個のサブカテゴリーが挙げられた。

また、16個のサブカテゴリーは、【正しい知識の伝達】【がん教育を通して育てたい力】【授業者に求められる姿勢】という3つのカテゴリーにまとめられた（表6）。

(1) 【正しい知識の伝達】

がんは罹患しても、治療を続けていて元気な人はたくさんいるため、がんイコール壮絶な闘病生活、死、不治の病というネガティブな要素を植え付けることなく、《がんイコール死ではない》ということ伝えていた。また、がんは2人に1人は罹患すると言われるように《がんは誰でもかかる可能性のある病気》である。他の多くの病気のうちの1つで、治療による回復が可能になってきている。そのため、「がんになってしまった人」と「がんではない人」という区別や差別を持たずに普通にする、つまり《がんを特別視しない》ことが大切であると分かった。

《がんの原因》を伝える際には、科学的根拠に基づき、がん経験者は生活習慣が悪いという偏見や、家族のがんが遺伝するかもしれないという過剰な不安を持たせないように配慮していた。また、がんは罹患したことは悪いことではなく、がんになった人のせいでも、家族のせいでも、《がんにかかるのは誰のせいでもない》ことを伝えるなど、心理面への配慮も求められている。

[表6] 「授業中に行う配慮」に関するカテゴリー分類

| 【カテゴリー】 | 《サブカテゴリー》 | コード |
|---|---|--|
| (1)正しい知識の伝達 | がんイコール死ではない | 経験を話したり、正しい知識を話す。(経) |
| | | 今は医療が進歩しているので「今は大丈夫」としっかり伝える。(経) |
| | | がんイコール壮絶な闘病生活、死、不治の病というネガティブな要素を植え付けないでほしい。(経) |
| | | がんイコール死ではないと思える世の中になっていくとよい。(経) |
| | | がんイコール死ではない、特別ではない。(経) |
| | | がんは治る病気だと意識してほしい。(経) |
| | がんの治療を続けていて元気な人もたくさんいる。(経) | |
| | がんは誰でもかかる可能性のある病気 | がんは誰でもかかる可能性のある病気だと伝えてほしい。(経) |
| | | がんを特別視しない。(看) |
| | がんを特別視しない | 他の病気と同じ。(看) |
| がんイコール不治の病ではなく2人に1人は罹患するもので、特別な病気ではなく治療で回復することを伝えてほしい。(経) | | |
| 「がんになってしまった人」「がんではない人」という区別や差別をもたない、持たせない教育をしてほしい。(経) | | |
| がん教育を受けさせないのではなく、がんも他の多くの病気のうちの1つであることを伝えてほしい。(経) | | |
| がんの原因 | がん経験者だと分かっても普通にしてもらいたい。いいタイミングで「大丈夫？無理してない？」と声をかけてもらおうと嬉しいが、特別扱いしてほしい。(経) | |
| | 生活習慣だけが主要因ではない。(小) | |
| | 生活習慣だけでがんになったという偏見につながらないようにするために配慮が必要。(中) | |
| がんにかかるのは誰のせいでもない | がんになった人は必ずしも生活習慣が悪いわけではない。(看) | |
| | 家族は遺伝をととも怖がる場合もある。(経) | |
| 治療による身体的変化 | がんになったことが悪いことだとか、悪い人だから病気になったと結びつけてほしくない。(看) | |
| | がんになったことが悪いことだとか、悪い人だから病気になったと結びつけてほしくない。(看) | |
| (2)がん教育を通して育てたい力 | 共感する力 | 治療のため、髪が抜けてしまったりしても温かく見守ってほしい。(経) |
| | | 手術により、体の一部が普通と違う人もいる。(経) |
| | 共生への理解 | 気持ちを受け止めてくれると嬉しい。共感してくれると嬉しい。(経) |
| | | がん経験者は、がんを経験した人からの言葉に励まされる。(経) |
| | | 病気と共生する。(看) |
| | 自分のからだへの関心 | 共感や思いやりだけでなく、共生を教える必要がある。(小) |
| | | 「家族は第2の患者です」とポスターに書いてあり、そうなんだと思った。(経) |
| | | 子どもから「学校ではいつも通りにしたい、皆には知られたくない。」と言われた。(経) |
| | セルフケア能力(健康管理能力) | がんに限らず、闘病中の者や障がい者に対する心配りの方法等も話し合ってもらいたい。(経) |
| | | 自分自身のからだと対話することが大切。(看) |
| 意思決定力 | 自分のからだに興味を持つ。(看) | |
| | 自分自身の体調と向き合う。(看) | |
| | 自分の体を守るのは自分である。(看) | |
| (3)授業者に求められる姿勢 | 分かりやすい言葉 | 自分の体をモニタリングできる能力を身につけさせてほしい。(看) |
| | | セルフケア能力を高めるために教育の工夫が必要。(看) |
| | 優しい言葉かけ | どのように生きるか自分で決める。(看) |
| | | 自分のハンドルは自分で握る。(看) |
| | 伝え方に注意が必要な言葉 | たとえがんになっても、情報を探って治療する。(看) |
| 落ち着いた態度 | | わかりやすく真実を伝える。(経) |
| 柔軟な対応 | 不安や恐怖を感じる児童生徒もいると思うので、わかりやすく伝えることが大事。(経) | |
| | 優しい言葉が一番だと思う。(経) | |
| | 優しい言葉がけをしてください。(経) | |
| 落ち着いた態度 | がんは2人に1人がなる病気だから、みたくに罹患していないのに軽く言ってほしくない。(経) | |
| | 授業者の態度や雰囲気大切。笑顔やにやつくこと、照れ笑いに違和感があった。にこにこする授業でも、落ち込んでする授業でもない。(中) | |
| 柔軟な対応 | 授業中にしゃべりすぎると禁句が出てしまう。(中) | |
| | 構えない。(看) | |
| | 家族に患者がいることを授業中に生徒がつぶやいた場合、授業者の反応が大切。(中) | |
| | その人によって状況が違うので、現場の判断に任せられる。(小) | |

(2) 【がん教育を通して育てたい力】

がん経験者にとって自分の気持ちを受け止めてもらったり、共感してもらったりすることは喜びや闘病の支えとなるとの声があり、周囲の者には《共感する力》が求められている。これについて、林²⁾は「がん患者に共感し、その苦悩を理解しようとする過程で、他人を思いやり、いのちを大切にできる心情が育まれる。」と述べている³⁾。さらに、インタビューの中に「家族は第2の患者です」というポスターに共感したという声があった。このように、がん経験者だけでなく、がん経験者の家族を含めた周囲の人々と共

に過ごしていくためには、《共生への理解》が必要である。加えて、がんについて学ぶことは、他の病気で闘病中の人や障がいのある人への理解にもつながっていく。

自分のからだに興味を持ち対話、体調と向き合うというような《自分のからだへの関心》、日々自分の体をモニタリングして体調を整え、がんにならないようにする、またはがんになってもなるべく悪化しないように自分で自分の体を守るための《セルフケア能力（健康管理能力）》を育てて欲しいとの声があった。ほかにも、どのように生きるかを自分で決める、情報を探って治療するといった《意思決定力》が求められている。

(3) 【授業者に求められる姿勢】

授業者は、児童生徒が不安や恐怖を感じないように《分かりやすい言葉》を使い《優しい言葉かけをする》ことを大切にしていた。また、がんが「2人に1人は罹患する病気であること」に触れる際には、軽率にならないように《伝え方に注意が必要な言葉》があることが分かった。また、実際に授業を行う際には授業者の態度や雰囲気が必要であり、《落ち着いた態度》で《柔軟な対応》を心掛けていた。

3 授業後に行う配慮

がん教育の授業後に行う配慮には、《児童生徒発信の家族への健康教育》《家族への情報発信》という2つのサブカテゴリーが挙げられた。

【表7】「授業後に行う配慮」に関するカテゴリー分類

| 【カテゴリー】 | 【サブカテゴリー】 | コード |
|--------------|-----------------|---------------------------|
| がんに対する理解を広げる | 児童生徒発信の家族への健康教育 | 児童生徒発信の健康教育(看) |
| | | 家族への健康教育(看) |
| | | 児童生徒に家族を託す。(看) |
| | | 家族の行動変容(看) |
| | 家族への情報発信 | 授業後の学年だよりで児童生徒の感想を載せた。(中) |

また、2つのサブカテゴリーは、【がんに対する理解を広げる】という1つのカテゴリーにまとめられた(表7)。

がん教育実施校では《家族への情報発信》として、学年だよりや保健だより等に児童生徒の感想を載せることにより、がん教育について学校内外の多くの人に発信していた。また、《児童生徒発信の家族への健康教育》として、家庭内で児童生徒から家族へとがんについての情報発信されることで、禁煙や健康的な生活など家族の行動変容を期待していた。

4 授業前から授業後までを通して行う配慮

がん教育の授業前から授業後までを通して行う配慮には、《窓口を作る》《児童生徒の感受性に寄り添う》《家族にも言えない気持ちに寄り添う》《いつも通りに見守る》《がん経験者を思いやった言葉を選ぶ》《継続的にフォローする》という6つのサブカテゴリーが挙げられた。また、6つのサブカテゴリーは【配慮が必要だと分かった児童生徒や家族への個別フォロー】という1つのカテゴリーにまとめられた(表8)。

授業前から授業後までを通して、相談できる大人の存在や、辛い・苦しい・不安といった気持ちを発散できる場所が必要とされており、「心配なことがあったら言ってね、と相談窓口を作ること」が大切だと分かった。これらの相談窓口として、保健室の機能や養護教諭の共感性が活かされると考えられる。高等学校養護教諭の野口⁵⁾も「私たち養護教諭は日頃から心身の現代的課題や子どもたちの『打ち明け』に敏感であり『つなぐ』ことを大

[表8]「授業前から授業後を通して行う配慮」に関するカテゴリー分類

事にし、教職員と協働し対応する習慣がある」と述べており、養護教諭ががん教育に関わることで適切な支援に繋がると期待できる。また、前述の野口⁵⁾は「小児がん当事者や配慮を要する子どもたち

| 【カテゴリー】 | 《サブカテゴリー》 | コード |
|--|-----------------------------|---|
| 配慮が必要だと分かった児童生徒や家族への個別フォロー | 窓口を作る | 事前の個別確認(看) |
| | | 心配なことがあったら言ってね、と窓口を作る。(看) |
| | | 抱えきれなくなったときには相談できる大人を作っておくように話した。(経) |
| | | 辛いことや苦しいこと、不安な気持ちを発散できる場所は必要だと思う(経) |
| | 児童生徒の感受性に寄り添う | 家族にがん患者がいる児童生徒の受け止め方は、個別の感受性によって違いがある。(看) |
| | | 子どもから「学校ではいつも通りにしたい、皆には知られたくない。」と言われた。(経) |
| | | 「辛いことを話してくれてありがとう」という気持ちで話を聞いてほしい。(経) |
| | 家族にも言えない気持ちに寄り添う | 家族にも言えない気持ちもあるので、個別にゆっくり話を聞いてほしい。(経) |
| | いつも通りに見守る | 患者も家族も普通にしたいと思う。見守ってくれることがありがたい。(経) |
| | がん経験者を思いやった言葉を選ぶ | がん患者に対して「ステージはいくつ?」という言葉は使ってはいけない。(経) |
| 「乳がんはとってしまえばいい」など決してそうではなく、手術してから長い道のり。(経) | | |
| 継続的にフォローする | 個別フォローを1回で終わりにしない。(看) | |
| | がんで家族を亡くした子どもは個別フォローが必要。(看) | |

が、がん教育で傷つくことを避けるためには、学習前から子どもに対し個別に丁寧に対応することも必要である。丁寧な対応は、学習によりつらさを『打ち明けたい』生徒に対しても適切な支援となるであろう。」と述べている。

家族にがん経験者がいる児童生徒の受け止め方は様々であり、「家族にも言えない気持ち」があることも分かった。児童生徒によって個人差があり、ただ見守ってくれることを望む場合や個別にゆっくりと話を聞いてくれることを望む場合もあった。そのため、それぞれの《児童生徒の感受性に寄り添う》こと、ゆっくり丁寧に話を聴き、聴き手側が気持ちをしっかりと受け止めることが大切であると考えられる。また、話をする際には、「がん経験者を思いやった言葉を選ぶ」ことが必要である。

《継続的にフォローすること》を行い、がんで家族を亡くした児童生徒に対しては、特別扱いすることなく普通の対応を心掛け、「いつも通りに見守る」ことが求められていた。

これらの配慮事項を明らかにしながら、がん教育における配慮は、がん教育に限ったことではないことに気付いた。

野津⁶⁾は「学校では、これまでもさまざまな事情を抱えていたり複雑な状況におかれていたりする子どもが存在し、家庭や地域との連携を図りながら教育的な配慮を工夫する経験と知恵を持っているはずである。そうした蓄積を生かして、がん教育を実施する際にもより丁寧に適切に対応していくことが期待される。」と述べている。

明らかになった配慮事項を見てみると、どれもがん教育に限ったものではないことから、がん教育への不安が和らぎ、授業実践に向けた心構えを持つことができた。

VI まとめ

がん教育を推進する上で、児童生徒へどのような配慮をしたらよいか分からないことが、授業実践をためらう一因となっている現状があることから、がん教育を行う際にどのような配慮が必要かを明らかにしたいと考え、本研究に取り組んだ。

その結果、配慮が必要な場面には、授業前、授業中、授業後、授業前から授業後までの4つがあり、それぞれの場面において、以下のような配慮が必要であることが明らかになった。さらに、この結果を元にリーフレットを作成した。

1 授業前に行う配慮

既存の調査などから【既往歴がある児童生徒の把握】【家族にがん経験者がいる児童生徒の把握】をする。本人の意思や家族の意向を確認し、どのような配慮が必要か、家族を含めて相談後、実施する。ただし、事前に全ての情報を把握できないので、《家族にがん経験者がいることを前提とした授業》を行うため、【家族への周知】【指導内容の検討】を行う。

2 授業中の配慮

児童生徒に不安や恐怖を与えないように、《落ち着いた態度》と《分かりやすい言葉》で伝え、科学的な根拠に基づく【正しい知識の伝達】を心がける。また、がん経験者やその家族を含めた周囲の人々に《共感する力を育て》、《共生への理解》を深めること、また、《自分のからだへの関心》を持ち、自分と向き合い守っていくための《セルフケア能力》を高められるような授業を行う。

3 授業後の配慮

おたよりによる情報発信や、授業を受けた児童生徒から家族への健康教育により、【がんに対する理解を広げる】。

4 授業前から授業後までを通して行う配慮

児童生徒の不安を受け止める《窓口を作る》、一人一人の児童生徒やその家族の《児童生徒の感受性に寄り添う》ことで安心させ、継続的に【配慮が必要だと分かった児童生徒や家族への個別フォロー】を行う。

5 リーフレットの作成

研究を進めていく中で、「必要な配慮を理解し、安心した上でがん教育を行いたい」という私たちの考えは、日頃からあらゆる場面で配慮を重ねて学校教育活動を行っているからこそ生まれた願いなのだという事に気付いた。

今回作成したリーフレットを活用することで、がん教育を実践する際の不安感が軽減し、安心してがん教育が実践できるのではないかと期待している。リーフレットは、手に取って見てもらいやすい『簡易版』（資料1）と更に詳しく知りたいときのために『詳細版』（資料2）を作成した。また、リーフレット活用の効果検証のため、千葉市内小中学校の養護教諭にリーフレットを配付し、リーフレットの活用前後にアンケート調査（資料3）を取り、養護教諭の意識の変容をみていくこととした。

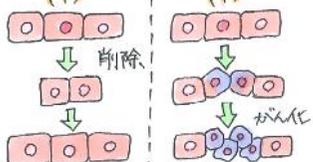
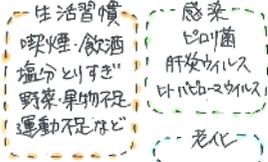
VIII おわりに

養護教諭らに本研究で明らかになった配慮事項を載せたリーフレットを活用してもらい、さらに、リーフレットの活用前後にアンケート調査を行うことで、配慮事項について関心を持ち、理解を深め、積極的ながん教育の実践に繋がることを望んでいる。

今後はアンケート調査の検証結果を生かし、更にごん教育実践に活用できる指導案や資料の作成に取り組んでいきたい。

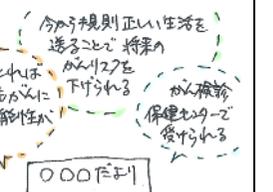
資料

【授業中に行う配慮】

| | | | | | | |
|----------|--|--|---|--|---|---|
| 正しい知識の伝達 | がんイコール死ではない  | がんは誰でもかかる可能性のある病気  | がんを特別視しない  | がんの原因  | がんには誰のせいでもない  | 治療による身体的変化  |
| | <ul style="list-style-type: none"> 不治の病ではない 早期発見、早期治療で日常生活可能 | <ul style="list-style-type: none"> 老化で細胞の修復機能が低下するので歳を取れば誰でもがんになる可能性がある | <ul style="list-style-type: none"> がんは生活習慣病 規則正しい生活と検診でがんリスク低下 | <ul style="list-style-type: none"> 生活習慣だけでなく細菌やウイルス感染、老化も原因 | <ul style="list-style-type: none"> 本人のせいでもない 家族のせいでもない | <ul style="list-style-type: none"> 抗がん剤の治療で見た目が変わっても、温かく見守る |

| | | | | | |
|-------------|--|---|--|---|--|
| 授業を通して育てたい力 | 共感する力  | 共生への理解  | 自分のからだへの関心  | セルフケア能力 (健康管理能力)  | 意思決定力  |
| | <ul style="list-style-type: none"> 共感する心 気持ちを受けとめる心が大切 | <ul style="list-style-type: none"> 家族の生活や気持ちに思いを寄せることが理解へつながる | <ul style="list-style-type: none"> 異常に気付いたらすぐに受診 | <ul style="list-style-type: none"> 自分の体を守るのは自分自身 定期的な検診 | <ul style="list-style-type: none"> 様々な治療法や生活の仕方の中から自分で選択 |

【授業後に行う配慮】

| | | | | | | |
|-------------|--|---|---|--|--|---|
| 授業者に求められる態度 | わかりやすく優しい言葉  | 伝え方に注意が必要な言葉  | 落ち着いた態度  | 柔軟な対応  | 児童生徒発信の家族への健康教育  | 家族への情報発信  |
| | <ul style="list-style-type: none"> 不安や恐怖を感じる児童生徒に分かりやすく優しい言葉で伝える | <ul style="list-style-type: none"> 経験者の言葉「罹患していないのに軽く言ってしまうと怖い」 | <ul style="list-style-type: none"> にこにこする授業でも落ち込んでくる授業でもない | <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒によって状況が違うので、心構えが必要 | <ul style="list-style-type: none"> 授業プリントを持ち帰り家族で話題に | <ul style="list-style-type: none"> 学年だよりや保健だよりで児童生徒の感想を載せて発信 |

【詳細版】 がん教育を円滑に実施するための配慮事項 ～安心してがん教育に取り組むために～

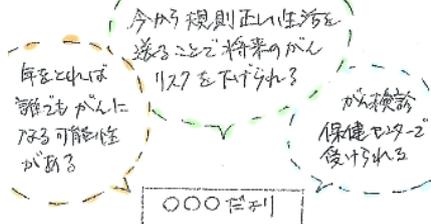
がん教育の推進が求められる中、がんについての正しい知識を普及させる必要性を感じながらも、児童生徒やその家族にがん経験者がいる場合にどのような配慮をすれば良いのかわからず、実施に踏み切れない現状があります。そこで、がん教育を行う際に必要な配慮事項が明らかになれば、指導者の不安が軽減されるのではないかと考え、がん経験者、がん患者のケアに従事している看護師、がん教育に取り組んでいる教員にインタビュー調査を行い、その結果を、【授業前】、【授業中】、【授業後】、【授業前から授業後まで】の4段階に分けてリーフレット化しました。段階に応じた具体的な配慮を知ることで、安心してがん教育に取り組める人が増えていくことを願っています。

【授業前に行う配慮】

| 既往歴がある 児童生徒の把握 | 家族への周知 | 家族にがん経験者がいる 児童生徒の把握 |
|--|---|---|
|  <p>保健調査票などから、がんや難病などの既往歴のある児童生徒がいるか確認します。</p> |  <p>文書等で児童生徒の家族に対し、がん教育の実施について通知します。状況に応じて、学年だよりなどで事前に授業内容を知らせたり授業参観を可能にしたりする方法もあります。</p> |  <p>情報を把握するための手段として学校職員への聞き取り、児童生徒への口頭での呼びかけ、任意のアンケートなどがあります。しかしすべての該当者を把握することは必要ではないしまた難しいこともあります。</p> |

| 家族にがん経験者がいる 児童生徒への対応 | 指導内容の検討 | 授業者の心構え |
|--|--|---|
|  <p>授業をうけるかどうかを児童生徒本人に確認します。その際には、授業を途中で離席したり、欠席したりすることも伝えます。また、授業をどのように行うか必要な配慮について学校全体で検討します（授業の時期、内容など）。</p> |  <p>外部講師に講話を依頼する場合は、授業内容が学習指導要領に沿った適切な内容かどうか事前に打ち合わせで確認します。</p> |  <p>家族にがん経験者がいる児童生徒がいることを前提として授業を展開しましょう。また、家族にがん経験者がいる児童生徒に対しても、態度を変えずにそっと見守ることが求められています。</p> |

【授業後に行う配慮】

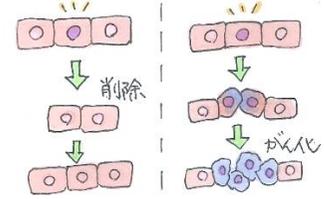
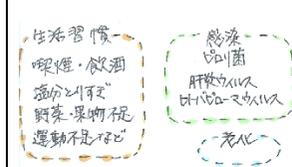
| 児童生徒発信の家族への健康教育 | 家族への情報発信 |
|---|--|
|  <p>授業後、実施したプリントを持ち帰らせたり、授業内容を家族で話すように促したりします。児童生徒が発信することで、保護者の禁煙や健康な生活のための行動変容がみられるかもしれません。</p> |  <p>学年だよりや保健だより等に児童生徒の感想を載せ、がん教育について学校内外の多くの人に発信します。</p> |

【授業前から授業後まで通じて行う配慮】

| 窓口をつくる | 児童生徒の感受性に寄り添う | 家族にも言えない気持ちに寄り添う |
|--|--|--|
|  <p>配慮が必要な児童生徒には「心配なことがあったら言ってね」と、窓口を作りましょう。抱えきれなくなった時にはいつでも相談できる大人を作っておくように話をしてみましょう。</p> |  <p>家族にがん経験者がいる児童生徒の受け止め方は一人一人違います。児童生徒の個別の感受性を大切にし、児童生徒から話を聞く際は、「つらいことを話してくれてありがとう。」という気持ちで寄り添いながら聞きましょう。</p> |  <p>児童生徒の話をゆっくり丁寧に聞くようにし、「いろいろな気持ちになることは普通。家族に言えないことがあっていい。」とその気持ちを受け止めましょう。</p> |

| いつも通り見守る | がん経験者を思いやった言葉を選ぶ | 継続的にフォローする |
|--|--|--|
|  <p>がん経験者やその家族の中には、学校では普通にしてほしいと感じる方もいます。児童生徒の気持ちに寄り添い見守りながら臨機応変に対応することが大切です。</p> |  <p>がん経験者に対して進行の度合いを聞いたり、その治療方法について自分の考えを述べたりすることは避けましょう。話をする際には、思いやった言葉を選びましょう。</p> |  <p>がんで家族を亡くした子どもは個別のフォローが大切です。個別フォローは1回だけでなく何度か行うようにしましょう。</p> |

【授業中に行う配慮】

| | | | | | | |
|----------|---|--|---|---|---|--|
| 正しい知識の伝達 | がんイコール死ではない | がんは誰でもかかる可能性のある病気 | がんを特別視しない | がんの原因 | がんに罹るのは誰のせいでもない | 治療による身体的変化 |
| |  <p>通院しなきゃ仕事</p> <p>医療が進歩しているので、がんは不治の病ではありません。早期発見・早期治療で回復したり、治療しながら日常生活を送ったりすることができます。</p> |  <p>がん細胞が発生しても、免疫の働きで修復されますが、老化すると修復機能が低下するので、歳を取れば誰でもがんにかかる可能性があります。</p> |  <p>がんは生活習慣病のひとつです。規則正しい生活を送り定期的に検診を受けることで、がんになるリスクを下げることができます。</p> |  <p>がんの原因には、生活習慣、感染、老化などがあります。生活習慣が悪いだけで、がんになるわけではありません。</p> |  <p>がんになるのは、本人のせいでも、家族のせいでもありません。健康な人でも毎日がん細胞が発生しているため、誰でもがんになる可能性があります。</p> |  <p>抗がん剤治療で一時的に髪が抜けたり、手術で体の一部が変わってしまったりすることもあります。温かく見守ることが大切です。</p> |

| | | | | | |
|---------------|---|---|---|--|---|
| がん教育を通じて育てたい力 | 共感する力 | 共生への理解 | 自分のからだへの関心 | セルフケア能力 (健康管理能力) | 意思決定力 |
| |  <p>がん経験者同士で支え合うグループもあります。がん経験者の気持ちを理解するのは難しいですが、気持ちを受け止めたり、共感したりすることで、相手の支えになります。</p> |  <p>がん経験者の中にはお子さんから「学校には知られたくない」と言われた方もいるそうです。がん経験者の家族の生活や気持ちに思いを寄せることもその方々の理解に繋がります。他の病気で闘病中の方や障がいを持つ方にとっても同じことが言えるでしょう。</p> |  <p>日頃から自分のからだに興味(関心)を持ち、自分のからだの変化や異常に気がついたら、すぐに受診することが大切です。</p> |  <p>自分のからだを守るのは自分であることを意識して生活をする、がん検診を受けられる年齢になれば、定期的に検診を受けるようにしましょう。</p> |  <p>がんになっても、様々な治療法、その人にあった生活の仕方があるので、情報を取り入れながら、自分がどうしたいかを決められるようにすることも大切です。</p> |

| | | | | |
|-------------|---|--|--|--|
| 授業者に求められる態度 | わかりやすく優しい言葉 | 伝え方に注意が必要な言葉 | 落ち着いた態度 | 柔軟な対応 |
| |  <p>不安や恐怖を感じる児童生徒もいるので分かりやすく優しい言葉で真実を伝えます。</p> |  <p>がん経験者の心情に配慮し、がんについて軽くなならないような伝え方にしましょう。</p> |  <p>声のトーンや表情に気を配ります。</p> |  <p>例えば、授業中に家族にがん経験者がいることをつがやくなど、様々な反応が予想されます。児童生徒の様子に合わせて柔軟に対応しましょう。</p> |

【NG ワードを Good ワードへ！】

| | |
|--|--|
| <p>※指導中、NG ワードを使用しないよう気を付ける。 ※児童生徒が NG ワードを使用したら、Good ワードで説明する。</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ×タバコを吸うとがんになる ×がんは遺伝する ×がんは死ぬ病気 ×がんになったら人生終わり ×がんの原因は本人の生活習慣や家族の遺伝 ×がんになった人はかわいそう | <ul style="list-style-type: none"> → ○がんになるリスクが高まる → ○遺伝だけが原因ではない → ○治療しながら生活できる → ○がんと上手につきあいながら日常生活を送ることができる → ○がんは誰でもなる病気。本人の生活習慣や家族の遺伝だけが原因ではない → ○がんと向き合って周囲の人たちと支え合い、工夫しながら自分の望む人生を送っている |

資料 3-1

がん教育の実態および授業者の心境に関するアンケート

市教研 保健養護部会 がん教育グループ

この調査は、がん教育の実態や授業者の心境に関するアンケート調査です。調査データは統計的に処理され、個人のプライバシー保護には十分に配慮して管理します。ご協力いただいた調査データは本研究を行う以外には使用いたしません。また、本調査では統計上必要なため、お名前を伺いますがこちらで統計処理後にお名前は削除します。

以下の質問に対し、あてはまる回答の数字を○で囲んでお答えください。

1 あなたの現在勤めている学校の校種は何ですか。

①小学校 ②中学校 ③特別支援学校

2 あなたの勤務している学校の学校番号を教えてください。例：新宿小→小1（すべて全角）、新宿中→中1、支援学校等は学校名を記入してください。

3 アンケートに回答いただいた方のお名前を教えてください。

4 あなたの職務経験年数をお答えください。（令和3年度末現在。講師経験も含む）

①0～5年 ②6～15年 ③16～25年 ④26～35年 ⑤36年以上

5 あなたの職種は何ですか。

①保健体育科教諭 ②養護教諭

6 あなたの学校では、今年度（令和4年度）にがん教育を実施しますか。※小学校での体育・保健領域「病気の予防」、中学校での保健体育・保健分野における「健康な生活と疾病の予防」「喫煙、飲酒、薬物乱用と健康」「個人の健康を守る社会の取り組み」の学習において、がんについて扱う場合も含まれます。

①すでに実施済み ②今後実施する予定 ③いいえ ④わからない

7 （質問6で「すでに実施済み」あるいは「今後実施する予定」と答えた方に聞きます。）がん教育の授業実施者は誰（の予定）ですか。（複数回答可）

①保健体育科教諭 ②担任 ③養護教諭 ④外部講師

8 あなたの学校には本人や家族にがん経験のある児童生徒はいますか。

①はい ②いいえ ③わからない

※以下の質問には、ご自分が授業実施予定ではない場合でもご自身が授業を実施することを想定してお答えください。

9 あなたはがん教育を実施するにあたり、配慮が必要だと感じますか。

①とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

10 がん教育授業を行う上で、どのような配慮が必要だと思いますか。思いつく配慮の例を箇条書きで上げてください。

| |
|--|
| |
|--|

11 あなたはがん教育を実施することに不安を感じますか。

①とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

12 あなた自身はがん教育に積極的に取り組もうと感じますか。

①とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

質問は以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

がん教育の実態および授業者の心境に関するアンケート

市教研 保健養護部会 がん教育グループ

この調査は、がん教育の実態や授業者の心境に関するアンケート調査です。調査データは統計的に処理され、個人のプライバシー保護には十分に配慮して管理します。ご協力いただいた調査データは本研究を行う以外には使用いたしません。また、本調査では統計上必要なため、お名前を伺いますがこちらで統計処理後にお名前は削除します。

※以下の質問にはリーフレット「がん教育を円滑に実施するための配慮事項」を読んでから、お答えください。

1 あなたの勤務している学校の学校番号を教えてください。例：新宿小→小1（すべて全角）、新宿中→中1、支援学校等は学校名を記入してください。

2 アンケートに回答いただいた方のお名前を教えてください。

3 以下にはリーフレットに記載したがん教育における配慮事項を挙げています。これらのうち、リーフレットを読むことで初めて知った配慮事項に全てチェックしてください。

- 既往歴がある児童生徒を把握する。
- がん教育実施を家族へ周知する。
- 家族にがん経験者がいる児童生徒を把握する。
- 家族にがん経験者がいる児童生徒への対応をする。
- 外部講師依頼時は事前に指導内容の検討をする。
- がん経験者がいる前提の心構えで授業をする。
- がんイコール死ではないと伝える。
- がんはだれでもかかる可能性のある病気であると伝える。
- がんを特別視せず生活習慣病の一つであると伝える。

- がんの原因は生活習慣だけではないと伝える。
- がんに罹るのは誰のせいでもないと伝える。
- 治療による身体的変化を見守ることの大切さを伝える。
- 共感する力が患者や家族の励みになると伝える。
- 相手の気持ちを理解し共生する力の育成について伝える。
- 自分のからだへの関心を高めることを伝える。
- セルフケア能力を高め、人生を選択できるように伝える。
- 意思決定力を高め、人生を選択できるように伝える。
- わかりやすく優しい言葉で真実を伝える。
- 伝え方に注意が必要な言葉に気をつける。
- 落ち着いた態度をとる。
- がんに対する児童生徒の反応に柔軟に対応する。
- 児童生徒発信で家族への健康教育の輪を広げる。
- 学年だより等で家族への情報発信をしていく。
- 児童生徒がいつでも相談できる窓口をつくる。
- 児童生徒の気持ちや感受性に寄り添う。
- 家族にも言えない気持ちに寄り添い、受け止める。
- いつもどおり見守りながら、臨機応変に対応する。
- がん経験者を思いやった言葉を選ぶ。
- 個別フォローが必要な場合継続的にフォローする。

4 がん教育授業を行う上で、リーフレットに挙げられたもの以外にも思いつく配慮があれば箇条書きで挙げてください。

| |
|--|
| |
|--|

5 リーフレットを読んだ感想をぜひお聞かせください。

6 あなたはがん教育を実施するにあたり、配慮が必要だと感じますか。

- ①とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

7 あなたはがん教育を実施することに不安を感じますか。

- ①とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

8 あなた自身ははがん教育に積極的に取り組もうと感じますか。

- ① とても感じる ②やや感じる ③あまり感じない ④まったく感じない

質問は以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

資料4

引用・参考文献

- 1) 「がん教育」の在り方に関する検討会：学校におけるがん教育の在り方について（報告）. 2017年3月.
- 2) 大曲睦恵. 石田裕二(2012). 成人がん患者の子どもへの支援の中で表出された言語的・非言語的表現内容の検討. 日本小児科学会雑誌. 116(5). 866—873.
- 3) 林和彦(2018). 子どもに対するがん教育に求められるもの—実践する医師の立場から—. 保健の科学. 60(2). 81—85.
- 4) 神前裕子. 小林真理子. 高橋都(2018). がんの親をもつ児童生徒への学校での支援の検討. 日本心理学会第82回大会論文集. 378.
- 5) 野口直美(2018). 価値ある学びとしてのがん教育の可能性. 保健の科学. 60(2). 86—93.
- 6) 野津有司(2018). 子どもに対するがん教育—学校で求められるもの—. 保健の科学 60(2). 76—80.